

大学生が参加する青少年教育の効果と課題

—岐阜大学全学共通教育科目「野外活動実習」を通して—

長岡 甫^{*1}・後藤 誠一^{*2}・二村 玲衣^{*2}・益川 浩一^{*2}

本稿では、岐阜大学の全学共通科目・社会教育士養成課程科目、また名古屋大学との連携開設科目として実施している「野外活動実習」について、2024年度に実施された実習内容や方法等を整理し、大学生が参加する青少年教育としての効果と課題を明らかにした。具体的には、効果として受講生のみならずSA等を含む参加者間の学びの相互作用、青少年教育の意義について実体験を通し学べることがあげられ、課題としては、学びを支える職員や施設の役割と関連づけながら体験的に学んだ青少年教育の意義を捉えられる事後学習のあり方を再考する必要性があげられた。

〈キーワード〉 野外活動実習、青少年教育、自然体験活動、社会教育士養成課程、全学共通教育

1. はじめに

題を明らかにするⁱ。

岐阜大学の社会教育士養成課程（以下、養成課程）は、全学共通教育科目として開講し、養成課程指定科目のうち24単位を取得することで、社会教育主事任用資格と社会教育士称号を取得できる。この養成課程指定科目のうち、青少年を対象とする教育・学習の場づくり、また、社会教育・生涯学習の現場で自然体験活動による学びの機会をつくる力量の形成（自然体験活動の指導者として必要な知識や技能を含む）を目指して、必修科目として「野外活動実習」（以下、実習）を設けている。つまり、岐阜大学の養成課程は、宿泊型の青少年教育施設で実習を実施していることに特徴がある。

本実習は、岐阜県高山市にある国立乗鞍青少年交流の家（以下、「交流の家」）において2泊3日で実施しており、養成課程受講者だけでなく、実習の内容に興味・関心を持って全学共通教育科目として履修する学生もいる。また、本実習は、2023年度から名古屋大学との連携開設科目に指定され、名古屋大学の学生も受講することが可能で、2023、24年度ともに名古屋大学の学生が受講している。

本稿では、2024年度実習の実践事例の内容や方法等を整理し、大学生が参加する青少年教育としての意義と課

2. 野外活動実習の概要

本実習は、野外活動・自然体験活動を指導する基礎的技能を習得することを目標としており、履修者数は2021年20名、2022年29名、2023年度36名、2024年度26名であった。そのうち、名大生は、2023年3名、2024年度2名である。2023年度までは全学共通教育科目としての受講者が大半を占めていたが、社会教育・生涯学習の基礎的な理解に養成課程受講者と非養成課程受講者の間で大きな差があったことから、2024年度から非養成課程受講者に事前学習を課した結果、養成課程受講者が受講者の多くを占めるようになった。

養成課程を全学共通教育で実施する前の教育学部実施時には、交流の家における自然体験活動ボランティアリーダー養成セミナーに参加し、同セミナーの日程後半では高山市内の小学校のセカンドスクール（高山市内の小学生が学校とは異なる第二の場所で宿泊を伴う自然体験を行う活動）参加の小学生に指導を行っていた（益川2007、寺尾・ぎふ地域学校協働活動センター2020参照）。しかし、岐阜大学全学共通教育科目で新しい養成課程を実施することになった2021年度はコロナ禍で、学内方針

*1 名古屋大学大学院教育発達科学研究科、地域協学センターアドバイザー
Effectiveness and Issues of Youth Education involving university students; “Practice of Field Activities” in Gifu University

*2 岐阜大学地域協学センター

で宿泊を伴う合宿が実施困難、学内の授業実施方針の緩和後も個室宿泊での実施という条件があり、交流の家は複数名で1室に宿泊する形をとっていることから交流の家での合宿は困難と判断した。そのため、2021年度は、①岐阜市少年自然の家での実習（火起こし体験とレトルト食品湯煎・食事、自然散策等）、②オンラインで交流の家と大学を結びボランティアリーダー養成セミナーに参加、という内容とした。

2022年度は、感染者数等の減少など対面授業の実施が容易になり、2021年度のオンライン実施はそれ自体効果があったものの、やはり対面の方が受講者の反応等を理解しやすく、グループワークを実施しやすいことから、①交流の家職員の対面講義（自然体験活動の意義、学校教育と青少年教育の相違、子どもを取り巻く環境や発達段階ごとの特徴、指導者の関わり方等の講義とグループワーク、薪割り等の体験による学習）、②前年同様の岐阜市少年自然の家での実習、③最終日に全体の振り返りとした。

2023年度は、交流の家での合宿形式での実施が可能となり、2泊3日の対面での宿泊実習とした。受講生に加えて、引率教員1名、実習補助に当たるSA4名も参加した。また、当該年度から名古屋大学・岐阜大学の連携開設科目に指定され、名古屋大学学生も受講した。活動内容は、初日に、自然体験活動の意義や指導上の留意事項等の講義、グループの交流を図るキャンドルサービス、星空観察、二日目には、カレーオリエンテーリング（野外炊事とフィールドワークの合体したもの）、環境学習のためのゲーム、クラフトワーク、三日目に振り返りをした。

本講義においては、養成課程の社会教育実習と同様に非養成課程受講者には社会教育・生涯学習の基礎的な理解を求めていることから、事前の課題（養成課程受講者は復習もかねて指定課題を読む）を出し、最終日に実習での活動内容と学びを振り返り、それを個々でレポートに記述することで学びの可視化を行っている。振り返りにおいては、経験学習を意識して、経験の振り返りと教訓等の引き出しを大切にしている。学びのメタな理解のため、振り返りでは、なぜ上手くいったのか、なぜ上手くいかなかったのかといった良い部分と課題の部分の両面から深めていく機会としている。

3. 2024年度野外活動実習の実践事例

(1)2024年度野外活動実習と国立乗鞍青少年交流の家の概要

2024年度の岐阜大学野外活動実習は10月12日（土）から10月14日（月・祝）までの3日間にわたって、交流の家にて行われた。交流の家は、乗鞍岳（標高3,026m）の中腹、標高1,510mに位置する青少年教育施設である。四方を山々に囲まれた自然豊かな場所にあり、宿泊・生活施設、野外活動施設、スポーツ施設、学習・文化施設など、多様な活動プログラムが可能な複合施設となっている。「環境」や「ボランティア」に関連した事業、豊かな自然を生かした自然体験活動、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育成するプログラムなどが実施されている。また、高地に位置する青少年教育施設であり、高地トレーニングやスキートの練習などで訪れる人も多いという特徴をもつ。

活動プログラムは、事前に交流の家職員と実習担当教員の間での協議が重ねられる中で決定されている。全体的に時間にゆとりを持たせたスケジュールが組まれており、実習内のプログラム以外の時間において学生同士の盛んな交流が可能となっている。

本実習には岐阜大学からの受講生24名、名古屋大学からの受講生2名が参加した。また、実習を補助するSAとして実習の経験者である岐阜大学の学生4名、TAとして名古屋大学の大学院生1名、引率教員として本実習の担当教員である岐阜大学教員2名が参加した。受講生の所属学部はさまざまであり、教職課程や社会教育士養成課程を履修していない学生も複数名参加していた。受講学年は1、2年生が多いものの、SA、TAを含め異なる学年の参加者が多数参加していた。SA、TAは、基本的には受講生とともに活動に参加しつつ写真・ビデオ撮影や記録、活動における補助・指導助言を行う役割を担った。引率教員は、全体の活動の運営を主としつつ、受講生の指導・支援にあたった。

(2)実習1日目(2024年10月12日)の活動

①11:30～12:00 入所式・オリエンテーション

岐阜市内から休憩をはさみバスで約3時間かけて交流の家に到着した。到着後すぐに交流の家の職員から、入所

式および施設の利用上の注意等のオリエンテーションが行われた。また、オリエンテーション後に引率教員から今回の実習の目的についての説明があった。ここでは特に、本実習には青少年教育活動の学習者として参加するだけでなく、青少年教育の指導者としての視点を持ちながら実習に参加することの必要性が強調された。この時点では、全体的にみて受講生同士の交流は少なく、やや堅い雰囲気であった。

②13:30～16:00 青少年教育・自然体験活動に関する講義

昼食を挟み午後からは、交流の家の職員による講義が行われた。講義は、①「青少年教育」について理解しよう、②「青少年教育」の役割を知ろう、③「(自然) 体験活動」について理解しよう、の3つのテーマから構成されていた。講義の形式は、学校の授業のようにスライドを用いながらの説明を主な形としつつ、時折受講生に対して質問し回答を求めるなど、双方向のやりとりも多く組み込まれていた。受講生も積極的に発言をし、各々熱心にメモを取る姿が見られた。

はじめに、「青少年教育」の概念について、「教育」全体における位置づけという観点から説明がなされた。縦軸に年齢（大人—子ども）、横軸に「学校—学校外」を置いた四象限の図を用いながら、青少年を対象にした学校外教育である「青少年教育」の位置が視覚的に示された。そして、いじめや不登校などの青少年が直面する様々な課題に対して、社会全体で連携・協力しながら支援していくこと、その一端を担うものとして青少年教育の意義があるという説明がなされた。さらに、青少年教育施設である「少年自然の家」「青年の家」の施設数が減少傾向であるという記事を参照しつつ、職員から「この研修を通して、青少年教育施設が必要であるか考えてみて」という呼びかけがなされた。

続いて、青少年教育とは何かについて具体的な説明がなされた。青少年教育の特徴として、体験活動・体験学習から出会いや交流が生まれてくるとともに、学習者の主体的な活動であるということが挙げられた。特に、交流の家では、知識ではなく実体験の中での成功・失敗体験を重ねていくことで身につく力を大切にされた教育活動が行われている。現代の青少年が抱える課題として体験活動の少なさが挙げられ、それと結びつける形で青少年教育の

意義が説明された。こうした問題意識から、多くの都市部に住む子どもが自然体験活動を行うために交流の家を利用しており、青少年教育施設の役割の一つとして「学校教育を外側から支援する」ことがあるということが強調された。また、青少年教育の特徴を学校教育と比較した説明も行われ、青少年教育も教育活動であるため「意図的」「計画的」にプログラムを提供することは学校教育と同じであるが、そこに「押し付け」や正解を求めない点に違いがあるという。それゆえに、到達目標として抽象的な資質・能力を身につけることを期待してプログラムを提供する指導者と、プログラムを通して具体的な体験・経験・スキルを獲得していく学習者の間には、計画していた身につけてほしい能力と活動を通じた実態にズレがあることは当たり前であること、したがって指導者には学習者が自ら実体験の中で学んでいく過程を「応援」というスタンスが重要であるということが述べられた。

最後に、自然体験学習、およびその指導において必要なことについての説明が行われた。自然体験学習における指導者の心構えとして、まず学習者のライフステージに応じたプログラムを作成することや、相手に合わせた言葉づかいや説明などが必要である。重ねて、活動前は、学習者のことを知る、活動中は信頼関係の構築、日程進行を意識する、活動後は学習者の感想や評価を知る、主催者からの評価を知るといった、活動を計画し遂行していく上での指導者の役割についての話も展開された。また、指導者として気をつける必要があるものとしてハラスメントが挙げられ、受講生とともにハラスメントとは何かを考える時間が長くとられた。なお、講義では担当職員の教職経験や授業の進め方などの実践的な話も織り交ぜられており、受講生は概論的な学びだけでなく青少年教育指導のあり方を体感的に学ぶことができていた。

③16:00～17:00 館内オリエンタリング・振り返り

講義の後は、4～5人ごとに班に分かれて「NORIKURA SDGs Quest」というレクリエーション活動を行った。これは、館内に点在するSDGsについてのクイズが書かれた紙を探し、解きながら「あいことば」を完成させる、館内オリエンタリングである。主に小中学生向けの活動として行なわれるゲームであり、館内の各部屋の位置・設備を確認するとともに、SDGsについて学ぶことができ

る活動となっている。その場で組まれた班であったことから、必ずしも受講前から仲の良い受講生同士と一緒に館内を回ったわけではないが、このオリエンテーリングを通じて日常会話も生まれており、この活動終了後には受講生間の交流がより円滑になっていたように見受けられる。

この活動の終了後には活動全体の振り返りとして、午後の活動を通じた学びや3日間の実習の目標などを各自で考える時間を取った。どのようなことを考えたか問うたところ、3人が挙手し、自身の考えを発表した。教育学部の受講生から「大学の授業の中では学べなかった、『指導者』としての立場の学びを教員の実体験から学べたことがよかった」、「教師の資質の学びを得たい」といった声や、教育学部所属ではなく社会教育士養成課程も受けていない受講生からは「アウトドアが好きだからという気持ちで実習に参加したが、教育も面白いと感じた」といった声上がるなど、青少年教育についての知識を得るだけではなく、広く教育とは何かということや、教育に関わろうとする人に必要な資質について考えた受講生が多かったように思われる。

④19:00～21:00 キャンドルサービス・星空観察

夕食を挟んでキャンドルサービスが行われた。キャンドルサービスは、ろうそくの明かりと暗闇とのコントラストの中で語り合うことで、自己と他者を再認識し、自己実現や仲間との連帯感の醸成につながるものとして、交流の家では定例の活動となっている。受講生は、翌日に行われる野外炊事の班（各班5～6人）に分かれて、自己紹介を含む交流を行った。講堂の中央部に置かれた燭台にSAによって火が灯され、その火を各自受けとり、照明を落として交流が始まった。各班他学部、異学年、他大学を含む多様なメンバーで構成されていたが、非日常的な独特な雰囲気が漂う空間であることも相まって、自己紹介のあとには互いに踏み込んだ質問をしたり、それに対する返答から話がふくらんだり、はじめてともに活動を行う仲間とは思えないほど親睦が深められていた。

また、キャンドルサービス終了後には星空観察が行われた。この活動をもって1日目の実習のプログラムは終了となった。また、この時には元々の知り合い同士だけではなく、複数の人の間での交流も生まれており、1日目の

活動を通して全体の仲が深まった様子を見てとることができた。

(3)実習2日目(2024年10月14日)の活動

①9:00～10:30 カレーウォークラリー

カレーウォークラリーは、施設内の豊かな自然の中を歩き、各スポットの看板に書かれた合い言葉を集めることで、ウォークラリー終了後に作るカレーの具材を集めることができるという小学生向けのプログラムである。やや短めのコースで、小学生であれば1時間～1時間半ほどで回り終えられる。受講生はキャンドルサービスから引き続いて、野外炊事の班に分かれて短時間の作戦会議の後に出発し、各班1枚ずつ配られた地図をもとに約45分間のウォークラリーを行った。場所によっては歩みにくい山道を進んだり、様々な植物や虫と出会ったりと、自然を感じることができるルートになっていた。また、交流の家を囲む山々を眺められる絶景スポットにも出会うことができるようになっている。小学生向けのプログラムではあるものの、受講生も大いに楽しんでおり、各班盛り上がりを見せていた。

ウォークラリー終了後には、野外炊事時の注意点等を学ぶ危険予知トレーニング「危険チェックのグループワーク」が行われた。これは、野外炊事場の様子を描いたイラストの中から、危険だと思われることを2,3人のグループに分かれて話し合い、全体で発表するものである。全体発表の後、担当職員から、このワークを指導する上で意識したことは「みんなで話すことによる新たな発見」、「ゲームを通して自然に楽しく学ぶことができること」であり、この活動では単に知識を伝えるのではなく、学習者が主体的に参加し、仲間と話し合いながら自然に学べるプログラムであることが重要であると説明があった。

②10:30～13:30 野外炊事

「危険チェックのグループワーク」終了後、受講生は担当職員から簡単な説明を受けて野外炊事に取りかかった。薪割りの仕方や野菜の切り方、お米の炊き方のおおよその説明はあったものの、火起こしからすべて受講生が行うため、作業は各班で話し合い、互いに協力しあいながら進められていた。担当職員は必要に応じて助言に回っていたが、ほとんど自主性に任されていた。そのため、班に

よっては火が消えかける、ご飯がなかなか焚けないといった状況も生まれたが、班員自ら落ちている木を集めたり、担当職員の助言を受けに行ったりするなどの対応をとり、各班とも予定されていた時間内にカレーを完成させていた。自主性に任されることにより、主体的な「体験学習」がデザインされていた活動であった。

完成後は各班でカレーを食べていたが、他の班の出来を見に行ったり、量が多かった所は他の班に配りに行ったりするなど班同士の交流も多く見られた。その後片付けに入り、食器洗いの際には職員による厳しい洗い直しチェックに多くの班が苦戦を強いられた。何度も洗い直したり、チェックに合格した他の班の助言を受けたりしながら、無事全ての班が片づけを完了させた。炊事から片付けまでの一連の活動に、班の中でのつながりを超えて生まれた連帯感のもとで、受講生が協働しながら主体的に取り組むことができていたのは、前日からの受講生同士の関係形成によるものであるとともに、自主性を重んじ、手を出しすぎない青少年教育施設における野外炊事の活動の特徴によるものとして考えられる。

③14:00～16:00 SDGs カードゲーム「moritomirai モリトミライ」

休憩後、館内に場所を移して「moritomirai モリトミライ」というゲームを実施した。これは、山梨県内において産学官民が連携して SDGs につながる活動を推進していく「やまなし SDGs プロジェクト」の活動の一環として開発され、小学校高学年から大人まで幅広い世代を対象としたカードゲームになっている。山の所有者、森林組合、猟師、行政職員、住宅メーカー、学校教員など様々な仕事やゴールを持った 10 種類の役割があり、ある地域に存在する森林をめぐる、それぞれの役割に与えられた仕事や生活を選択しながらミッションを遂行するゲームである。遂行する過程で、森林の状況と自らの生活とが相互作用の中で変化していき、その変化を捉えることで、森林と自らの生活とリンクさせて理解することができるゲームになっている。公式 HP には、このゲームで学べることとして、「森の役割と私たちの生活との関わりや正しい知識の理解」ⁱⁱ、「協働歩調の必要性」ⁱⁱⁱ、「経済活動と森林資源の好循環を生むことが持続可能な森作りへ繋がる」の 3 点が挙げられている^{iv}。交流の家は SDGs の取り

組みに力を入れており、SDG を学ぶ活動として実習プログラムの一つに組み込まれていた。

はじめに、担当職員からこのプログラムのねらいとして、環境学習の一環ではあるものの「コミュニケーションを大切にしたい遊び」であること、「気づいたことを話す、それをきちんと受けとめる」こと、氷山の一角の話为例に挙げながら「自分と向き合うこと」の 3 点が示された。また、ゲームの開始前に森林についての学習をする時間が設けられた。どのような森が「豊かな森」、「貧しい森」であるかについての説明では、多くの受講生が真剣にメモを取っていた。ゲームがスタートすると、受講生は活発にコミュニケーションをとりあい、仲間と攻略を練りながらミッション遂行を目指していた。各々のミッションの遂行と森林の状況の変化の関係が視覚化されるため、一つひとつの選択や他の仕事との協力の仕方などがいかに環境に影響を与えるかについて楽しみながら学ぶことができる。生活や経済、環境は一見無関係に動いているようで、密接に連動していることが理解できるゲームになっていた。すべての役割がミッションを遂行することができたわけではないものの、地域の環境は守られた状態でゲームは終了した。

ゲーム終了後には振り返りが行われ、意見交換が行われた。はじめは、ゲームの結果に対する感想が主な内容となっていたが、途中「このゲームにおいて何が重要であったか」という問いが担当職員から投げかけられると、生活の様式や生活における意識など自身の生活現実とも関わることを回答する受講生も現れた。楽しく活動する中で環境問題に関わる疑似的な体験をし、振り返ることで学びにつながるという学習プロセスが意識されていた活動であった。

④19:00～20:30 クラフト「アロマグネット」

夕食後は、工作活動として「アロマグネット」を制作した。飛騨地方は、豊かな森林資源を生かした木工が有名な地域である。その制作過程で廃材となった部分を利用して行われるのがこの「アロマグネット」であり、交流の家の SDGs の取り組みの一つにもなっている。直径 3cm ほどの円状にカットされた木の枝の圧縮材に、鉛筆で下書きをした上からバーニングペンを用いてなぞることでイラストを描いたり文字を刻んだりしてデザインし、最後

に木のオイルを垂らして香りをつける。また、裏面には小さくぼみが作られており、そこに小さなマグネットを木槌で打ち込むことで完成する。オイルもヒノキ(木部)、ヒノキ(枝葉)、ヒメコマツ(木部)、ヒメコマツ(枝葉)の4種類あり、好みの香りを選ぶことができる。

4人程度で班を作りテーブルごとに分かれて行われた。はじめに引率教員から「アロママグネット」の作り方、およびSDGsの取り組みの一つであることが伝えられた後に工作が始められた。どのテーブルにおいてもデザインやお互いの完成度についてなど、様々な話題をめぐって交流が行われていた。また、作業が進むとテーブルを超えて作品を紹介し合ったり、アドバイスをしたりと、全体での交流も行われるようになっていった。作業の進捗は各々異なっていたが、独自のイラスト、香りづけが施された作品を作り上げ、予定時間内に全ての受講生が完成させることができた。

2日間の活動を通して、受講生同士はもちろんSAやTA、教員も含む関係形成がなされていた。2日目の活動はこれで終了したが、その後も談話ホールなどで就寝までの時間をともに過ごす様子が見られた。

(3)実習3日目(2024年10月14日)の活動

①AM9:00~10:50 振り返りワーク

最終日は、2日間の活動についての振り返りの時間が設けられた。野外炊事を行った班に分かれて座り、振り返りを行なった。はじめに、教員から今回の実習を通して「何を学んだか」、それが「なぜ学べたのか」という2つの問いが与えられ、最後の全体発表に向けて各班で準備をする時間として1時間50分が用意された。各班のテーブルには模造紙と付箋、カラーペンが置かれており、リーダーを決めること以外は特に指示はなく、進め方は各班に任されていた。また、途中教員から、「学んだ」とは「こう変わった」、「今後の生活にどう発展、応用させていくか」といったことも含んだ意味であるとの助言があった。SA、TAは記録のために巡回するとともに、話し合いに参加し助言を行う場面もあった。

いずれの班でも、リーダーを中心に時間配分についての話し合いを行った後、配られた付箋にカラーペンを用いて考えたことについて各自書き出す時間を設け、その後班の中で話し合っ

て整理していく、KJ法の形式で発表準備を進めていった。個人で書き出す段階においては、主に「何を学んだか」について、「指導者としての倫理」、「実体験の重要性」などの1日目の職員による講義中のメモや、コミュニケーションをとる際に重要なこととしての「相手の話をまずは受けとめる」など各活動で職員が話していたキーワードといった知識として学んだことが多く書かれていた。また、「協力することの大切さ」、「自分で発見することの大切さ」など自身の実習での実体験を通した学びについての記述も多くあった。班の中でお互いの学びを話し合い、まとめていく場面では、講義や活動の際に職員の話をとおして学んだこと、自らの活動を通した実体験の学びの二つに大きく分けてグルーピングされていった。そのうえで、それぞれを「知識・指導者としての学び」、「活動者としての学び」として整理し、後者をさらに細分化していく班が多かった。しかし、長時間にわたる活発な話し合いが進められ、SAやTAも話し合いに参加していく中で、班によっては「知識・指導者としての学び」と「活動者としての学び」をリンクさせて話す班も生まれてきた。それは特に、「指導者としての学び」という点に表れていた。つまり、受講生が実体験を通して学んだことが、交流の家の職員の自分自身への関わり方や実習プログラムによるものであるとの認識である。それは、指導者の資質についての知識としてだけではなく、それを実体験の中からも感じ取ることができたものとして捉え直す契機が生まれていたということでもあるだろう。その後は、各班全体発表に向けて話し合いの結果を模造紙にまとめていった。各々が書いた付箋を同じような内容どうしでまとめてグルーピングし、そのグループ同士のつながりを線で結んだり、言葉を加えたりする形で分かりやすく整理していった。どのようにしたら分かりやすく説明できるか、巡回するSAの助言も受けながら試行錯誤し、どの部分を誰が発表するのかなども自主的に話し合っ

②11:00~12:00 振り返りの全体発表・退所式

各班での話し合いおよび発表準備を終え、休憩を挟んでから全体での発表を行った。各班5分ずつの持ち時間で、前に出て模造紙を全体に見せながら順番に発表していく。班ごとのやり方で「実習を通して何を学んだか」に

について発表を行っていたが、どの班も共通して、講義の中で学んだ青少年教育の意義や指導者の役割、実体験の中で学んだコミュニケーションのあり方、自然体験活動や普段あまり経験しない生活環境の中で自主的に行動することがいかに重要であるか、というところに重点を置いて説明を行っていた。また、発表の中で、受講生同士で3日間の頑張りを讃えたり、職員への感謝を伝えたりする班もあり、多くの受講生が発表を通して3日間の活動を振り返り気づきや学びを整理することができたと思われる。各班の発表終了後には、交流の家の職員から各班にコメントをいただき、全体の発表を終えた。

全体発表の後は、そのまま退所式へと移った。1日目の講義を担当した職員から言葉をいただき、講義の際に3日間の実習の終了後に受講生に問うとされていた、「青少年教育施設が必要であるかどうか」の質問がなされた。多くの受講生が、青少年教育・自然体験活動の意義やそれを支える青少年教育施設の役割について、講義の内容から学ぶだけでなく実体験を通して感じる事ができた。

4. 野外活動実習の効果と課題

(1) 野外活動実習の効果

ここまで述べてきた活動の詳細を踏まえつつ、大学生が授業の一環で野外活動実習を行なうことによる学生にとっての効果について考えたい。

第一に、多様な参加者によるそれぞれの学びと相互作用を生む効果があると考えられる。本実習の履修生である受講生は、自然体験活動における学習者としての様々な学びを実体験の中で獲得するとともに、指導者に必要な役割についても講義や活動中の職員の話の中から多く学んでおり、振り返り時にはそれらが言語化されていた。また、SAは以前実習に参加した者としてその経験を生かし、受講生のサポートに回った。活動の準備を通して活動を組み立てていく一端を担ったり、活動中に受講生に対して助言を行なったりと、青少年教育の指導者としての視点を、指導者としての実践を通して学ぶことができたものと思われる。こうした学びが参加者間で重なり合うことで、それぞれの学びに相乗効果が生まれていた。

さらに、今回の実習には異なる学部・専攻や学年、大学の学生が参加していた。受講生は、はじめは学年ごとや知

り合い同士での関わりがほとんどであったものの、活動をとにもする中で徐々に関係性が広がり、次第に休憩時間や食事の時間等にも学年や学部、所属大学を超えてコミュニケーションが生まれるようになっていった。それによって活動プログラム内での学びだけでなく、普段の授業についての交流や自身の学習や研究の関心、さらにはそれらを踏まえた今後の進路の話までを語り合う場面が見られた。日常の立場・価値観を超えて、ともに自らについて語り合えたことは、それぞれの今後の大学生活、さらにはその後の進路の選択などにおいても非常に有意義であったと思われる。大学生活を送る中で、サークルなどの活動で他学年や他大学の学生とつながることはあるものの、自身の関心のある学習・研究課題や、進路などの自らの生活について語り合う関係性を築くのは簡単なことではない。これが本実習において可能になったのは、本実習が岐阜大学の全学共通教育科目かつ名古屋大学との連携開設科目であったことに加え、SAやTAの参加などによって多様な学生が存在していたこと、そして寝食をともしながら同じ目標をもってともに活動していくという、青少年教育の特徴のためであると理解できるのではなかろうか。

第二に、参加者が実体験を通して青少年教育の意義を感じ取ることができた点を挙げたい。1日目の講義の中でも説明があったが、都市化や過疎化が進行する中で、現代の青少年は同世代の仲間とともに自然の中で遊ぶ体験を日常的にもつことは難しくなっており、それは今回参加した受講生も同様であると思われる。そうした中で本実習は、受講生にとって自然体験学習の意義を体験的に認識する機会となった。実際に、どの受講生も他者と協働しながら主体的に、かつ前向きに本実習に取り組んでおり、非常に充実した3日間を過ごしていた。本実習の振り返りの際にも、「学習者としての学び」として様々な要素が各々から出されており、どの班においても模造紙の半分以上の面積を占めたほどであった。多くの受講生が自然体験学習、青少年教育の意義について実感を伴って学ぶことができたと考えられる。

(2) 野外活動実習の課題と展望

続いて、本実習の課題と展望について、これから社会教育士養成課程で学んでいく学生や、教員を目指す学生に

対する期待と関わらせながら述べたい。

今後の課題として挙げられるのは、受講生が本実習において自らの体験の中で学んだ青少年教育の意義について、それを支える職員や施設の役割と関連させながら捉えられるよう、事後学習のあり方を再考することである。受講生らは本実習の振り返りの際、自らの学習者としての実体験を通じた学びについては言語化できており、さらに既述のようにそうした学びを生み出すものとして指導者の資質を捉え返そうとする契機も生まれていた。しかし、学習者の主体的な学びを支えるプログラムそのものの役割や、プログラムを計画する指導者の役割、プログラムを実現させる青少年教育施設の役割について、本実習における自らの体験との関係で整理するまでには至っておらず、「指導者としての学び」については、講義の中や活動中の職員の発言をまとめるにとどまっていた。もちろん、本実習の目標が「野外活動・自然体験活動を指導する基礎的技能を習得すること」であることに鑑みれば、職員の話の中から指導者としてのスキルについて学び、実際に指導を受けることで、目標はある程度達成されたと捉えることもできよう。しかし、社会教育、学校教育において指導者を目指す学生にとっては、今後学びを進めていく中で、実習における自らの体験を振り返りながら青少年教育、自然体験活動の役割・意義についてより深い理解を得ることが求められると考えられる。この点については、次年度以降導入する予定である事前学習用の動画教材において、実習中に着目してほしい観点として示すこととしたい。なお、この動画教材は青少年教育や自然体験活動に関する基礎的な知識を学ぶとともに、本実習についての事前説明をすることを主目的として作成し、来年度以降の受講生に提供するものである。

近年の学習指導要領改訂や社会教育法改正にも見られるように、青少年の自然体験学習などの体験活動の充実が学校教育、社会教育ともに求められている事項である。しかし、青少年教育施設の施設数が年々減少しているという記事が本実習の講義でも示されていた通り、実際に、2021 年度実施の社会教育調査によれば青少年教育施設の数は、2005 年以降急激に減少している。また、指定管理者制度の導入率も年々上昇し、2021 年度には 46.3%に

も上っており、これは他の社会教育施設の施設種と比較して 2 番目に高い数値である。自然体験活動などの青少年教育の重要性が広く認められながらも、それを支える青少年教育施設の事業やそこで専門性を持って働くはずである職員の立場は、不安定になりかねないという状況が続いているといえよう。それは、最終的に青少年教育における青少年の学習の機会やその質に大きな影響を及ぼしてしまう可能性を高める。本実習の受講生は、青少年教育の意義について実感を伴って学んだはずである。本実習で得た「学習者としての学び」を、それを支える専門家である指導者や、青少年教育施設の役割と重ねながら再度捉え直し、社会教育が直面している課題と照らし合わせることで、今後学習を進めていくうえでの課題となると考えられる。

参考文献

- 後藤誠一・益川浩一・二村玲衣（2023）「アクティブ・ラーニングを重視した社会教育主事（社会教育士）養成課程科目の意義と課題—岐阜大学の事例—」『岐阜大学カリキュラム開発研究』Vol.39 No.1、pp. 47-56、2023
- 文部科学省（2023）「令和 3 年度社会教育統計」
- 益川浩一（2007）「青少年の成長・発達における野外活動・集団宿泊活動の意義に関する調査研究—国立乗鞍青年の家・セカンドスクール事業に焦点をあて」『岐阜大学総合情報メディアセンター生涯学習システム開発研究』第 5 号、pp.83-91
- 寺尾美紅・ぎふ地域学校協働活動センター（2020）「体験活動が子どもの生活に与える影響—岐阜県高山市における野外活動・集団宿泊活動『セカンドスクール』に着目して」『モノグラフ 地域学校協働活動 2』ぎふ地域学校協働活動センター

ⁱ なお、2022、23 年度の取組は、後藤・益川・二村（2023）の事例として紹介しており、本稿は、2024 年度に焦点を当てている。

ⁱⁱ moritomirai 運営事務局ホームページ「森林の現状や持続的な活用について楽しく学ぶことができるカードゲーム『moritomirai（モリトミライ）』」<https://www.projectdesign.co.jp/moritomirai/service/>（最終閲覧 2024 年 11 月 21 日）